

（司会）

皆様こんにちは。

本日は、「当事者目線の障がい福祉推進シンポジウム～ともに生きる社会を目指して～」にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。

本日の総合司会を務めます、かながわSDGsスマイル大使のMITSUMIと申します。どうぞよろしくお願いたします。

本日のプログラムは三部構成となっております。第一部は黒岩知事による「当事者目線の障がい福祉の推進」をテーマにした講演、その講演に続いて、様々な障がいのある4人の方々にご登壇いただき、知事とのクロストークをいたします。

第二部では、3名の有識者から、「中井やまゆり園における当事者目線の支援の取組」と題し、お話しいたします。

午後2時頃に休憩を挟みまして、第三部は、パネルディスカッション「それぞれが描く当事者目線の障がい福祉のみらい」をテーマに、ともに生きる社会の実現に向けたディスカッションをいたします。

終了時刻は午後3時15分を予定しています。皆様どうぞ最後までお付き合いください。

それではただいまから、第一部、知事講演「当事者目線の障がい福祉の推進～ともに生きる社会を目指して～」を始めます。黒岩知事、お願いたします。

【第一部 知事講演、クロストーク】

「当事者目線の障がい福祉」の推進 ～ともに生きる社会を目指して～

（黒岩知事）

神奈川県知事の黒岩祐治です。本日は日曜日にかかわらず、「当事者目線の障がい福祉推進シンポジウム」、これにたくさんの皆様にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。そして今日はオンラインでご視聴の方も随分たくさんいらっしゃると聞いておりますので、有意義な時間にしていきたく思っております。

私も先般はコロナに感染してしまいまして、1週間、自宅療養を余儀なくされました。その中でもオンラインを使ってですね、仕事もしていましたけれども、やっぱり今日は何としても、この場にいたいなという気持ちが強かったのですが、何とか金曜日に自宅療養があけて、今日ここに駆けつけることができました。

それでは早速、この「当事者目線の障害福祉推進条例～ともに生きる社会を目指して～」、これはつい先般、議会で全会一致で成立したわけでありまして、まずは、これは一体何なのかといったところからお話をしてみたいと思います。

6年前に津久井やまゆり園事件が起きました。とても信じられないような事件で19人も貴重な命が奪われた。コミュニケーションが取れない人間は生きていく意味がないんだ、といったでたらめなことで、次々次々殺害をしていったという、極めて残酷な事件であり

ました。

そしてこの時に、私も現場に行った時はですね、その血だらけの現場ですからね、体育館に集まっていたいて支援が続けられておりました。この場で私も様々なものを見て感じたものがありましたけども、振り返ってみて、正直申し上げますと私は、次々判断を間違えていました。この間違えたことをどんなふうに変えてきたかといったことも、皆さんに、正直にお話をしていきたいと思えます。

この時に、こんな現場で掃除したからと言って、支援を続けてくださいというのは無理だなど。ただその、職員の皆さん、それから家族会の皆さんから建て替えてくれと言われました。分かりました。じゃあ建て替えましょう。160人規模の施設を建て替えると、すぐに約束をしたわけでありましたが、今から思えば、これがまず、最初の第一の間違いでありました。そして、この再生本部といったものを立ち上げて、どんなふうはこの津久井やまゆり園を再生していこうか議論を始めました。そして、建替えの方針、全面建替えの方針を出したのですけれども、3か月ぐらい経ってから、いろんなところから、知事は何を勘違いしているんだと。今や地域分散型で地域移行していく、小規模でやっていくというのが時代の大きな福祉の流れなのに、そんな大規模施設をまた作り直すとは何を考えているんだ、といった意見が出てきましたので、ここで撤回をいたしました。

知事が一旦言ったことを撤回するというのは恥ずかしいことです。でも、これはやっぱり一から議論し直そうといったことで、議論し直しました。そして再生基本構想というのをいただいてですね。最終的には、そこに大規模施設を建て替えるのではなくて、2か所に分けて、そして全部小規模の形、地域移行を前提とした形で再生していくことに決めました。

そんな中で、だんだん私も再生に向かって進んでいっていると思っていました。ところが、この津久井やまゆり園でもですね、信じられないような支援が続いていました。これはテレビでも紹介された松田さんという女性ですけれども、津久井にいるときには、このような車椅子に、ずっと縛りつけられていました。

そして、この方は、その後この施設を出て、別の施設に移ったら、このような表情になりました。一体何が起きたのか、といったあたりで、これまで建物の話をずっとしていましたが、ハードですね。それよりもその支援の中身を、もう1回ちゃんと目を向けなきゃいけないんじゃないのかなと思って、こういった事例を踏まえながら、その共同会でどんな支援が行われていたんだといったことを調べてみると、いろいろ出てきました。

この松田さんが典型ですね。そして、なぜこの人が縛りつけられているんだと。部屋に24時間閉じ込められている人もいます。何で？と言ったならば、要するに、強度行動障がいとって、いろいろな刺激に過敏に反応する、そのことによって暴れちゃうとか、自分で自分を傷つけたりもする。「危険だ、その人の安全のために部屋に閉じ込めてあげとくんだ。」

「この人暴れるから、危険だから、車椅子に縛りつけておいてあげるんだ。」と、当たり前に行われていました。

でも、これは今の定義からいうと、虐待なんですね。明らかに虐待なんですね。再生

む なが たてもの ちいきいこう ぜんてい こしつ ちゅうしん
 に向かっている中で、建物をこうしていこうという、地域移行を前提とした、個室を中心
 かたち でやっしていこうと言っても、行われているソフトの支援の中身が、職員が
 いっしょうけんめい がんば ぎやくたい かさ
 一生懸命、頑張っているが、虐待を重ねている。「どういことなんだ、これは。」とい
 なか どうじしや みな いけんこうかん
 った中で、当事者の皆さんと意見交換をいたしました。

その時に、私は彼女に会いに行きました。そして会いに行ったときに、最初に、お母さ
 んもいらっしゃったんですけども、普通はお母さんの方へこう行きますよね。でも、そう
 じゃなくて、松田さん本人にむきあっしていこうと思っでですね。ぱつと彼女に会ったとき
 に、「ごめんね」って、私は謝りました。そしてこのように、肩を叩きながらずっと「ご
 めんね」って、「今こんないい表情をしているじゃないか。気づかなくてごめんね」っ
 て。「ずっと車椅子に座っでいて嫌だったんだね。気づかなくてごめんね、ごめんね」っ
 ずっと言ったら、彼女はずっで領いて聞いっでくれましたけれども、正直言っで、分
 かっでいるか分かっていないか、私も分かんなかったです。でも、言っ続けました。

その後、お母さんが話に入っできて、「津久井やまゆり園」と言葉が出た瞬間に、彼女
 はぱつと立ちあがっで部屋を出っで行こうとしました。「ちょっと待っで」と。やっぱり「ご
 めんね。本当にあそこで嫌な思っをしたんだね。ごめんね、ごめんね、ごめんね。」っ
 うと、また落ち着いっでくれました。衝撃だったのは、この後です。「じゃあ、僕帰るから
 ね」っで帰ろうと思ったら、彼女は僕の後をついて来っでくれました。そして、玄関のとこ
 ろまで来っでくれた。「見送りしてくれったんだ。ありがどうね」と言っで帰ろうと思ったら、
 こんどは、そこからまた靴を履いっで、車のところへ出っでくれました。そして、帰る車を
 ずっで見送っでくれました。

気持ちを通じったんだっで。それが、私が感っじた初めての体験でありました。絶対分
 かってるんだ、通じっでいるんだと。表現はうまくできないかもしれないけど、通じっでいるん
 だっで。これは、大きな大きな出来事でありました。この人の本当の思っに寄り添うとい
 うか、寄り添うのじゃなくて、この人の本当の思っになんなきや、話が始まらないんじ
 かないか。今まで考へてみたら、こういうその福祉のあり方は、私自身もそうでしたけれ
 ども、まずは、親の皆さんとお話しますよね。親御さんと話をする。親御さんも大変な思
 いされてきたんですよ。この施設、例えば津久井やまゆり園に行くまでの間、いろん
 なところに行っで拒否されて、拒否されて、やっで津久井やまゆり園で見っでくれた。そう
 いっう思っを持った親御さんたちの声をお聞いっでいる。あと支援を仕っでている職員の皆さんの声も
 聞いっでいる。でも、当事者の皆さんの声っで本当に聞いっでいたでしょうか、という思っが
 してまいりました。

そうすると、これは松田さんだけのことではありませんでした。この人、平野さん。同
 じことです。彼も津久井やまゆり園で、24時間部屋に閉じ込められていました。その彼が
 この笑顔。この発泡スチロールに貼っであるシールを、刃物を使っでばんばん剥がすとい
 う作業を、ニコニコしながらやっでいました。彼は津久井やまゆり園に居る時には、暴れ
 て危険だからとっで、部屋に24時間閉じ込められていたそうです。こんなに変わるもん
 なんだ。彼に対しても、「ごめんね、ごめんね」っで。この笑顔です。

後ろにいる吉田さんも同じです。一生懸命やっ^て働いていました。彼なんかは、津久井やまゆり園^{えん}にいるときに、妙な痣^{あざ}がいっぱいあるというふうなことが明らかになったけれども、結局何が^あったか、よく分からないままになっていたような人でありましたけども、こんなに大きく変わるもんだなど。

そして中井やまゆり園、これは県の直営施設です。津久井やまゆり園は、県の指定管理による施設^{しせつ}ですけども、中井やまゆり園^{えん}というの、県の直営施設^{しせつ}でも、虐待^{ぎやくたい}と言わざるを得ないものが、今もつづいていたと。私、見に行きました。

衝撃^{しょうげき}だったのは、このAさん。この部屋の中に、部屋から出せない女性^{にょせい}がいるんですと言われて、部屋の窓^{まど}から覗^{のぞ}きました。「いないじゃないですか」って。「いや、いるですよ」「どこに？」と言ったら、「この真下^{ました}にいるんです」と。ドアの一番先^{いちばんさき}のところに、こんな形でへばりついて、部屋から出たい^でんですね、きっと。でこうやって、ずっとずっとこのままです。この部屋には何にもありませんでした。何にもない部屋^{へや}って、なかなか見たことない。動物園^{どうぶつえん}以下^かでした、この部屋は。そこにこんなふう^{へや}に、彼女はコミュニケーションも取れない、そして暴れ^{あば}ちゃうと。危険^{きけん}だからということで、動物^{どうぶつ}以下の扱い^{あつかい}ですね。こんな形^{かたち}でありました。その彼女^{かのじょ}は、さっき申し上げた施設^{しせつ}、てらん広場^{ひろば}で、全部^{ぜんぶ}てらん広場^{ひろば}です、今までの。移^{うつ}って、そして、たった1泊^{ぱく}での表情^{ひょうじょう}。本当^{ほんとう}にお見せ^みしたいですけども、これ皆^{みな}さんと一緒^{いっしょ}に、この横^{よこ}に皆^{みな}さんと一緒^{いっしょ}になってですね、ソファ^{そふあ}に腰^{こし}かけて、ハロウイン^{はろういん}のパーティー^{ぱーてい}を楽し^{たの}んでいた。こんなに変わるもの^{もの}なのか、ということでありました。

この人^{ひと}の思い^{おも}になる、という支援^{しえん}をすると、こんなふう^かに変わるんだ^きということに気が付^ききました。

そういったときに、このちょうどの部屋^{へや}ですね。実は^{じつ}ですね、振り返^ふり返^{がえ}りの中で、私^{わたし}は共同会^{きょうどうかい}に指定管理^{していかんり}をずっとつづけてもらおうという方向^{ほうこう}でいました。それは私^{わたし}が決めたわけじゃなくて、そういう流れ^{なが}になっていた。しかし、どんどん、どんどん津久井やまゆり園^{えん}での共同会^{きょうどうかい}による虐待^{ぎやくたい}といったものが明らか^{あき}になってきた。このま^まい^いったならば、ちょうどの彼の裁判^かが、植松死刑囚^{さいばん}の裁判^{さいばん}が始まる頃^{ころ}でしたから、このま^まい^いったならば、県^{けん}は一体何^{いったいなに}をやっていたんだということになるからと言って、「ちょっと待^まった」と。「共同会^{きょうどうかい}の指定管理^{していかんり}継続^{けいぞく}はストップ」と強引^{ごういん}にやりました。もう議会^{ぎかい}からは大変^{たいへん}な反発^{はんぱつ}を受けました。議会^{ぎかい}と一緒^{いっしょ}に決めたことを何^{なに}で知事^{ちじ}が勝手^かに止めるんだと、もう孤立無援^{こりつむえん}でありました。

その時に、この部屋^{へや}に障がい当事者^{しょうがいとうじしや}皆^{みな}さんが集^{あつ}まってくれました。ピープルファースト^{ぴーぶるふあーすと}の皆^{みな}さんが、全国^{ぜんこく}からど^どん^どん、ど^どん^どん、ど^どん^どん集^{あつ}ま^あってきて、この部屋^{へや}に450人^{にん}。全国^{ぜんこく}から集^{あつ}まった障がい当事者^{しょうがいとうじしや}の皆^{みな}さんが来^こられて、「知事^{ちじ}、頑張^{がんば}ってくれ」って。「当事者^{とうじしや}目線^{めせん}と言^いっているのは正^{ただ}しい。頑張^{がんば}ってや^やってくれ。」「津久井やまゆり園^{えん}事件^{じけん}とか二^に度^どと起^おこさないでくれ」といった、こんな要望^{ようぼう}を受け取^うりました。この前^{まえ}でガツポーズ^{がっぽーず}しているのは、あの時^{とき}の松田^{まつだ}さんでもあり^ありました。これ私^{わたし}にとっ^とては、本当^{ほんとう}に大^おきな力^{ちから}をいただ^たいた出来事^{できごと}でありました。

間違^{まちが}ってない、これでい^{どう}く^{じしや}んだ^{ほんにん}とい^{こえ}った^きことで、そして、「当事者本人の声を聞^きかな^きき^や駄^だ目^めだ」とい^いう^こと^とで、当事者^{とうじしや}の^{みな}皆^たさん^{たい}との^わ対^て話^{って}、これを徹^て底^て的^てに^きや^つって^いま^いり^まし^た。

これは、この後^{あと}登^{とう}場^{じやう}さ^られる^な良^ら崎^{さき}さん^ごです^ごけど、「に^にじ^じい^いろ^ろで^でGO^{GO}!」で活^か動^{つう}さ^られて^いま^いす。皆^{みな}さん^{なか}中^{ちゆう}に入^{はい}って、いろ^いろ^ろの^は話^{なし}を^あし^あたり^とか^かね。これ^これ^も「ア^あール^ー・ド^ど・ヴ^ヴィ^ィー^ぶブル^る」とい^いって^ね、障^さが^い者^者の^アア^ート^トを^やっ^てら^っし^やる^とこ^ころ^で、皆^{みな}さん^{みな}と^は話^{なし}を^あし^あたり^とか^かね。今日^{きゆう}も^こ来^きら^れて^いま^いす^けど^ね、猿^{さる}渡^{わた}さん^さと^じっ^くり^お話^{なし}を^させ^てい^ただ^きま^した[。]そして、高^{たか}野^のさん^えとい^えう^え ALS^えの^{かん}患^{じゃ}者^者さん^かで、彼^{かれ}は^{けん}県^{ちゆう}庁^{しやう}職^{しやく}員^{いん}と^して^われ^われ^こが^{よう}雇^わ用^{よう}し^てい^ます。ロ^ろボ^ぼットの^おri^りhi^ひme^めを^{つか}っ^て、様^さま^まな^あア^あド^どバ^ばイ^いス^すを^もら^って^いる^とこ^ころ^であ^りま^す。こ^こう^いっ^たピ^ぴー^ぶル^ぶフ^ふア^あー^すト^とと^おン^んラ^らイ^いン^んで^もや^りま^した^ね。

そして、当事者目線の障がい福祉に係る将来展望検討委員会。条例に向けて、いろ^いろ^ろの^{けん}検^{けん}討^{とう}し^てい^こう^いう^中で、こ^ここ^こに^は障^さが^い者^者の^皆皆^{みな}さん³人^に入^{はい}っ^てい^ただ^きて[、]徹^て底^て的^に議^ぎ論^をい^たし^まし^た。そ^んな^中で、報^{ほう}告^{こく}書^{しよ}を^いた^だい^たと^いっ^たこ^とで^あり^まし^た。「当^{とう}事^じ者^め目^め線^{せん}の^障障^さが^い福^ふ祉^し」、こ^これ^を推^{すい}進^{しん}し^てい^くた^めの^条条^{れい}を^ちゃ^んと^つく^りま^しよ^うとい^う話^にな^った[。]

こ^こう^いっ^たこ^とを^うけ^て、実^{じつ}は、国^{こく}連^{れん}の^{しょう}障^が害^{がい}者^{しゃ}権^{けん}利^り委^い員^{いん}会^{かい}の^らラ^すカ^かス^す先^{せん}生^{せい}とい^うで^すね、こ^の副^{ふく}委^{いん}員^{ちゆう}長^{ちやう}が^にほ^んに^しさ^つに^こら^れま^した。国^{こく}連^{れん}で^の障^さが^い者^{しゃ}の^{けん}権^{けん}利^りを^{すす}め^てい^こう^いう^中で、日^にほ^んは^どん^な現^{げん}状^{じやう}な^のか。私^{わたし}は、彼^{かれ}の^まえ^で日^にほ^んの^{げん}現^{げん}状^{じやう}を^いう^のは^{ほん}当^{たう}に^ため^らわ^れま^した。「な^なんだ、日^にほ^んは^まだ^そん^な現^{げん}状^{じやう}な^のか」と、も^う徹^て底^て的^に馬^ば鹿^かに^され^ると^{おも}い^まし^たが、一^{いっ}し^う懸^{けん}命^{めい}話^わを^しま^した。た^だ結^{けつ}果^か的^{てき}に^は、彼^{かれ}は^ひじ^{ょう}常^{じやう}に^{かん}感^{かん}銘^{めい}を^うけ^てく^ださ^つた^いう^話を^きき^まし^た。何^{なに}に^{かん}感^{かん}銘^{めい}を^うけ^てく^れた^のか^と聞^きいた^らば、障^さが^い者^者に^ち、知^ち事^じが^ちよ^くせ^つあ^あと^あま^あ謝^あっ^てい^るとい^うこ^と。こ^んな^話は^聞いた^こと^がな^いと^いっ^て、彼^{かれ}は^{かん}感^{かん}銘^{めい}を^うけ^てく^れた^いう^こと^であ^りま^した。

そ^んな^中で、「当^{とう}事^じ者^め目^め線^{せん}の^{しょう}障^が害^{がい}福^ふ祉^し推^{すい}進^{しん}条^{じょう}例^{れい}～と^もに^いし^る社^{しゃ}会^{かい}を^めざ^して～」とい^うた^{もの}を、議^ぎ会^{かい}の^皆皆^{みな}さん^にご^{てい}案^{あん}し^て、そ^して^いろ^ろな^議論^をし^た上^で、最^{さい}終^{しゆう}的^{てき}に^は全^{ぜん}会^{かい}一^{いっ}致^ちで^{せい}立^{りつ}を^いた^しま^した。と^ころ^が、こ^の当^{とう}事^じ者^めの^皆皆^{みな}さん^は、ズ^ずケ^けズ^ずケ^け、ズ^ずケ^けズ^ずケ^け言^いっ^てく^れま^すね。後^{あと}か^ら登^{とう}場^{じやう}さ^られ^ます^が、ズ^ずケ^けズ^ずケ^け言^いま^すか^らね。遠^{えん}慮^{りよ}な^しで^すか^らね。「当^{とう}事^じ者^め目^め線^{せん}の^{しょう}障^が害^{がい}福^ふ祉^し条^{じょう}例^{れい}を^つく^るの^はい^いけ^ど、条^{じょう}例^{れい}の^{ぶん}文^{ぶん}章^{しやう}な^んて^難し^くて、私^{わたし}た^ちに^はわ^かり^ませ^ん」と^いっ^て、「じ^じゃ^あ、わ^わか^かり^やす^くし^まし^よう^よ」と^いっ^て、「じ^じゃ^あ、そ^のた^めの^{けん}検^{けん}討^{とう}委^い員^{いん}会^{かい}を^つく^りま^しよ^うよ」^とい^って[、]当^{とう}事^じ者^めの^皆皆^{みな}さん^みん^なに^{はい}入^{はい}っ^てい^ただ^きて、そ^して^条条^{れい}の^いち^{いち}文^{ぶん}一^{いち}文^{ぶん}を^{ぜん}全^{ぜん}部^ぶわ^かり^やす^くし^てで^きま^した。

こ^れは^おそ^らく、日^にほ^んの^{なか}で^は初^はめ^ての^こと^だと^{おも}い^ます^ね。条^{じょう}例^{れい}本^{ほん}体^{たい}が^出た^と同^{どう}時^じに、「わ^わか^かり^やす^い版^{ばん}」が^同時^じに^出た^とい^った^こと^にな^った^いう^次第^{だい}で^あり^まし^た。

さ^てこ^れか^ら、こ^れを^どん^なふ^うに^して^形に^して^いく^かと。条^{じょう}例^{れい}が^でき^たか^ら、「あ^あ、よ^よか^かつ^た、よ^よか^かつ^たね。終^{しゆう}わ^わつ^た。」じ^じゃ^あな^いで^すよ^ね。条^{じょう}例^{れい}が^でき^ても、何^{なん}も^か変^{へん}わ^わつ^てな^いで^すか^らね。こ^こか^ら始^はま^るん^だ。「当^{とう}事^じ者^め目^め線^{せん}の^{しょう}障^が害^{がい}福^ふ祉^し」^とい^うの^は、こ^うい^うも^んな^んだ、と^いっ^たこ^とが^あた^り前^{まえ}に^{なる}。こ^れが^今始^{いま}ま^つて^いる^とい^った^こと^であ^りま^して、そ^のた^めに^はま^ず、こ^の条^{じょう}例^{れい}が^も持^もつ^てい^る意^い味^みは^何な^のか^と。ど^んな^背景^{けい}で^出

てきたのかといったことを、より多くの方にご理解いただいて、そして皆で、そっちを目指していこうといった、その場の第1回目が今日であります。

中井やまゆり園で今、その改革が始まっています。この後この「当事者目線」という考え方を入れたらどんなふうになるのか。生々しいレポートがあると思いますが、そういったことを踏まえながら、是非しっかりと皆さん、今日の議論に参加していただきたいと思っております。ご清聴ありがとうございました。

(司会)

黒岩知事、ありがとうございました。

それではここからは知事のお話にもありました、条例の「わかりやすい版」の作成に携わられたワーキンググループの皆様にもご登壇いただきます。どうぞ前へお願いいたします。

(司会)

ご登壇者のお名前をご紹介します。会場の皆様から見て左から、ピープルファースト横浜会長、小西 勉様。ブルースカイクラブ会長、富田 佑様。神奈川県障害者自立生活支援センター、猿 渡 達明様。ピアサポーター、下条 章子様です。

クロストークの進行は黒岩知事をお願いいたします。

(黒岩知事)

それでは、まさに当事者の皆さん、言いたい放題言われる方ですから、楽しみにしていただきたいと思いますけどね。まずは小西さん、先ほどのスライドにありました、ピープルファーストからいただいた要望書の中に、「暮らす場所は自分で決めたい。私たちのことは私たち抜きで決めないでほしい」とありました。

小西さんが望む暮らす場所とはどういったものでしょうか。お話をいただきたいと思います。

(小西氏)

自由な暮らしが良いですね。スライドにあったのが、2020年2月20日の要望書です。私たちは、部屋に閉じ込められたり、車椅子に縛りつけられたりするために生まれてきたんだらうかなど話しました。実は、6年前にも仲間の声を聞いてくださいと、県に要望書を持ってきました。県の人からは「もう親の意見を聞いているから」と言われました。ショックでした。自分たちの話を聞いてもらえないような気がしました。

僕の暮らしの中で、大切にしているのは、場所ではなく、居場所、場です。僕には、仕事、ピープルファースト、毎日行くコンビニ、美術館などの居場所があります。そこでは、いつも「人のつながり」があります。こういうことが、暮らしに必要なだと思います。

また、自分のほしい場所には友達が必要です。寂しくなる時もあったり、頭に来る時も

ありますが、そんな時にも会いに来てくれる人が関わり続けてくれる存在であれば、自分の心の中に居場所ができたような気がします。自分のやりたいことをお押ししてくれたり、一緒に考えてくれたり、悩んだり、自分の気持ちを分かってくれる存在が必要です。職員にもそんな存在になってほしいです。

施設に暮らす人たちにも、居場所と友達が必要です。冠婚葬祭に参列したり、楽しく外出したり、会議に参加したり、仲間たちの可能性に目を向けてください。仲間たちは、みんな心があるし、幸せを求めて生きています。

拘束や部屋に閉じ込めるということをやめることで、幸せではありません。何もない環境から、仕事、趣味、一緒に作り出すその苦勞の先に幸せがあります。友達をつくるチャンスが必要です。福祉サービスじゃなく社会を理解してもらいたいです。人と人の通じ合う仲間たちが、自信を持って活躍できる場が必要です。そういう福祉が実現できるといいと思います。

(黒岩知事)

ありがとうございます。小西さんから、本当に教えていただきましたよね。地域移行と言いながら、地域から移動すればいいものではなくて、やはりそこに地域に行った時に自分たちの居場所というものが必要なんだと。そういったやっぱり友達、仲間というのは、そこに必要なんだ、といったことのメッセージを、ずっと発信してくださって、これは、非常にわれわれおおきな気づきとなりました。今日はありがとうございます。

それでは次は、富田さんですね。条例は誰もがその人らしく生き生きと暮らせる社会の実現を目指しておりまして、障がい者の地域生活移行に向けて取組を進めています。富田さんは一人暮らしをされておりますけれども、地域の中で大切にされていることは何でしょうか。

(富田氏)

はい。地域のことで一番大切にしていることは、朝、挨拶することです。おはようございますとか、例えば、魚屋さんに行ったら「昨日の魚おいしかったですよ」とお礼を言ってくれます。あと自分で自分の障がいのことを伝えていきます。

それで今の一人暮らしについてですけど、最初、自分は一人暮らしは無理っていう方が結構いらしたんです。でも、1人の職員さんが「富田さんなら大丈夫よ」って言われて、もう一人暮らしを始めて、母が亡くなって17年経つので、もう17年過ぎました。今は自分でも料理を作ったり、いろいろお風呂洗いとかやっています。なので、決して無理じゃないと自分では感じました。

あと、今から1か月近く前に、郵便局に行ったんですね。その時に僕、姉が好きなお菓子、生まれが仙台、東北なので、たまたま大船で東北の物産展をやっていたんですよ。その時に姉が好きなものを、最中とお饅頭を送ったんです。その時に郵便局の方から、最初はなんか「これお金かかるよ」なんて言っていたんですね。そしたらその後、また言ったん

です。「実を言うと、自分はちょっと障がいを持っていて」と言ったら、急に態度が変わったんです、その郵便局の方が。「じゃあ、こっちの安い方がいいね」とか言って、「お姉さん喜ぶね」なんて言ってくれたんです。

だから、障がいのあることを自分から言うと、結構いいことがあると思うんです。だから言える人が言っていた方がいいと思います。以上です。

くろいわちじ
(黒岩知事)

ありがとうございます。ねえ。なるほどなあという感じしますよね。そういう障がいがあるとちゃんとされた方が、皆さん、ちゃんと見てくれて、コミュニケーションが生まれるという。やっぱり「おはよう」という挨拶から始まるコミュニケーション。これがやっぱりないと、地域に移行すればいいってもんじゃないってことはね、小西さんのおっしゃることにもつながるところですよ。

とみたし
(富田氏)

ありがとうございます。あと、名古屋に行ってもそんな感じで、野球大好きなので、よく名古屋に行くと、そこでも伝えました。そしたらもうすごくやっぱり手厚くやってくれます。「何かお手伝いすることありますか」とかって言ってくれますもん。それがやっぱり、僕にとってうれしいですね。

くろいわちじ
(黒岩知事)

前に富田さんがおっしゃっていたDeNAは良くなりましたか。

とみたし
(富田氏)

はい。よくなりましたけど、ただ困っているのは、中日からDeNAに移った選手が2人いるんです。逆にDeNAから中日に来たのが2人いるんです。来年に。

くろいわちじ
(黒岩知事)

富田さんがこの会の中でね、DeNAに行ったら、何かすごい冷たい扱いされたと言われたので、私、DeNAの南場会長にすぐ電話したんですよ。「分かりました。すぐ何とかします」と言って。今度聞いたら「よくなりました」という話だった。

とみたし
(富田氏)

でも申し訳ない。切符売り場でちょっと人数が少ないって言ったら、もう知事の名前を言ったらびっくりしてましたよ。すぐに人が入ってくれました。

くろいわちじ
(黒岩知事)

ありがとう。本当にもう現場からのレポート、ありがとうございました。

それでは次は猿渡さんですね。猿渡さんとは昨年11月に、対談させていただきましたけれども、その際、「当事者目線の支援」、つまり心の声に耳を傾けた支援は、私たちにとっても喜びにつながるという双方向性のものだったといったお話を伺いまして、この考え方を参考に、条例の基本理念を考えているところでありました。

この「当事者目線の障がい福祉」について、改めて猿渡さんのお考えを教えてくださいませんか。

猿渡氏

その知事と対談させていただいたときに思ったことというのは、本当に知事がですね、毎回、津久井やまゆり園の再生基本構想の時も、ずっと毎回毎回来られて意見を述べられて帰って行ったり、あとは本当に私たち、「わかりやすい版」、「よくわかる版」を作っているんですけど、そういうところに来ていただいて、いろんなことっていうのを考えていただくんですけど、「当事者目線」というのは「本人目線」ですよ、まず。施設にいる方たちが、本当にそこを選んで入ったのかっていうと、そうではありません。やっぱりその、障がいが重くて、社会生活するのが難しい方が入ってしまった。けど、その方にはそれだけの支援の方法しかなかったわけではなくて、環境が生まれた時から別々にされてきて、それでその選択しかやっぱり周りの方も知らないの、社会的なバリア。今は医学モデルから社会モデルというふうになりましたけれども、まだまだ言葉だけしか動いてありません。

そういう中で、当事者目線で、本人が本当にそこに選んできたのか。例えば今、医療的ケアの必要なお子さんの法律もできました。でも実際住んでいる相模原のところでは、地域の学校に通ってない医療的ケアのお子さんもありますし、生活しにくい方がやっぱり施設に取り残されて虐待を受けてきているんですよ。それは僕、身体の方のネットワークと知的の方のオンブズマンと両方やっていく中で、やっぱり望んで、やっぱり自分が望んでいくことと、あと、相談支援専門員とかの立場では、グループホームが最後になってるんです。生活の場。そうじゃなくて、グループホームより先ですね、地域生活ってというのがあるんです。

その地域生活を選べるような、そのいろいろな選択肢はですね、私たち当事者が増やしていく、お互いに知りながら増やしていったり、知事もいろんなところへずっと行かれますと思うんですけども、そこに行きながら、自分がもし当事者だったらどうなるんだろうっていうことをですね、やっぱり常に考えて、支援者の方も動いてほしいなっていうのが一番の願いです。

なので、本当に、当事者でなければ分からないっていうことはあると思います。でも、当事者は、言葉で言いたくても言えない人はいっぱいいます。ですが、表現の表出っていうところはあると思うので、例えばこんなこと言われた時に顔真っ赤になったり怒ったり、筋緊張が強くなったり、そういうところですね。どんな状況があるのか、出てくるのかっていうのを調べてもらって、みんなと一緒に、この条例の「わかりやすい版」とか

条例ができただけじゃなくて、本当に毎年1回ないし半年に一遍、現実を見て、改革していければなと思います。以上です。

黒岩知事

ありがとうございます。本当に猿渡さんに教えていただいた、一生懸命この人の心の声、まさに思いは伝わっていても、それをうまく表現できない方はいらっしゃる。でもそれは、心が声を出している。その心の声をしっかり受けとめるっていう、それを受けとめて対応をちゃんと支援すれば、当事者の方も、「ああ、よかった」「通じてよかった」「やってくれてよかった」という安心感があると同時に、その支援した人も、その人の笑顔が出てきたりするとうれしくなるという。お互いのことだとか、つまり、「してあげる」「してもらおう」という形じゃなくて、支援する側も当事者も、要するにお互いがハッピーになるような形を目指していこうという。そういう非常に。

猿渡氏

そうですね。本当にいつも皆さん、ウイークネスですね。悪いところとか、できないところを支援しようと思ってるやられていると思うんですけども、ストレングスですね。その人のいい視点を是非見てもらって、良い支援に、その人のための支援とか、地域に還元されるための支援をしていただきたいと思います。

黒岩知事

ありがとうございました。それでは、下条さん。下条さんはですね、条例の「わかりやすい版」を作成するワーキンググループに参加していただきました。一方ピアサポーターとして、障がい者をサポートする活動をされていらっしゃいます。まさに障がい者が障がい者を支える、ともに生きる社会の取組の実践をされているわけでありまして、その活動内容と取組を通じて、感じていることがあれば教えていただきたいと思います。

下条氏

私は、地域移行・地域定着支援事業とピアサポーターをしています。地域移行・地域定着支援事業というのは、様々な事情で長期入院をしている当事者の退院促進や退院支援、障がい当事者が自分の体験を語ることで、障がいや障がい者について知らう、普及啓発などを行う事業です。地域移行・地域定着支援事業のピアサポーターは、病院などを訪問して入院している当事者の方々と交流会や茶話会などを開いたり、セミナーや勉強会などでの体験発表をしたり、退院の予定がある方への個別支援、外出時の同行支援などを行っています。ただ、今はコロナ禍のため、病院訪問ができなくなってしまっているのが、ニューズレターのよなものを定期的に作って、病院などに届けたり、オンラインで入院している方との

交流会などを行っています。

私はピアサポーターとして活動を始めて5年になりますが、活動をしてきた中で、当事者と支援者の間に温度差のようなものがあると感じています。当事者が困っていることなどを支援者に相談するとき、支援者は、今ある福祉サービスの枠の中でできることを提案してくれますが、当事者は、自分が困っていることを、そのものを解決する手段がほしいので、話がうまく伝わらない、納得できない、ほしいのはそれじゃないといった不満を感じることも多くなっています。

他にも説明が足りない、専門用語が多くて話についていけないといったこともあり、当事者側が聞いても分からないから諦めてしまっていることが多いです。これは支援者と当事者の間で信頼関係が築かれ、密なコミュニケーションが取れていれば、解消できることだと思います。

もう一つ感じるのは、認識の違いです。これは私が発達障がいだからというものもありますが、普段の生活で「普通」や「当たり前」、「一般常識」と言われるものが多いと思います。しかしこの「普通」や「当たり前」、「一般常識」というのは、全ての人に共通することではなく、障がいがない人にとっての「普通」なのです。障がいがない人にとっての「普通」は、当事者の「普通」とは違うかもしれません。周りとは違うことに気づかないことも多く、自分の中の普通の行動が、周りから見ると変だと思われる、避けられる、嫌な気持ちになるというそんな当事者も少なくはないと思います。

これからの支援には、多くの可能性や、普段と違う視点も反映されると良いと思います。もちろん当事者側も、「自分のことを話す」「自分から発信する」ことが重要です。この自分から発信するという点では、話せる当事者であるピアサポーターをもっと活用していただけると嬉しいと思います。

今回、作られた「当事者目線の障害福祉推進条例～ともに生きる社会を目指して～」では、言葉で意思を伝えられない当事者の意思を支援者が汲み取って、希望を最大限に反映させるような支援をするためのものだと、いうことになっています。ただ、当事者の考えや希望は100%、それを汲み取れるものではありません。やはり支援の方は、その病気自体になったことがないため、その人の、当事者の本当の辛さを知ることが難しいと思います。

この支援自体にもできることとできないことも必ず出てくるとは思いますが、今回の条例が、今の支援よりも、もっと当事者に寄り添った支援を目指せるものに役立つものになってほしいと私は考えています。以上です。

(黒岩知事)

ありがとうございました。もともと精神障がい者をサポートされているわけですが、こういった機会でも、様々な障がい者のところに行き行ってサポートされるという、いろんなところでもつながっているものを感じるというね。それと同時にやっぱりその、今の話を聞いてみると、当事者と支援する側、要するにコミュニケーションがどれだけ取れるかって

いうことですよ。

だからこの話をずっと考えてみると、今日ずっと話を聞いていても、いつもそう思うんですけれども、何もこれ障がい者の話をしてるんじゃないのかなっていうね。たまたま、障がい者の皆さんの話から始まっていますけれども、ここで皆さん訴えてらっしゃる話というのは、あれ、我々実は、みんな社会っていうのは、そういったことをしっかりみんなで配慮しなきゃいけないんじゃないのかなということ。それを皆さんが気づいて発信してくださっているのかなと、そんな感じさえするわけでありましてね。

そういうことをみんなで気づいて、いろんな形でアクションを起こしたことによって、まさに「ともに生きる社会」といったものが、前に進んでいくのかなと改めて思った次第でありました。4人の皆さん、どうもありがとうございました。

(司会)

ご登壇いただいた小西さん、富田さん、猿渡さん、下条さん、そして知事、ありがとうございました。

それでは続いて、第二部に移ります。会場の準備が整うまで少々お待ちください。